

# Tatia 校訂本 *Abhidharmasamuccayabhāṣya*

二

*ASBh* に関する研究の概略は、当然のことながら、本校訂本の Introduction にも言及されているが、ここではその記述を踏えながら、私なりに従来の成果を粗述したいと思う。

## 袴谷憲昭

一

待望久しかった *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya* (*ASBh*) 写本が、最近、インドの Nathmal Tatia の手によって校訂され、Tibetan Sanskrit Works Series の No. 17 として Patna の K. P. Jayaswal Research Institute より出版された。

出版に関する情報は、かねて早急の連絡をお願いしておいた、インドの Bhandarkar Oriental Research Institute へ留学中の阿部慈園氏が、約束に違わず私信を寄せて下さったことによるもので、ここに記して感謝の意を表したい。

今春一月二十七日付の氏のハガキを手にしたのは、それが研究室宛であったために、二月も半ば過ぎのことであったように思う。早

速日本の書店を通して入手したが、扉を繰ってみて驚いた。昨年即ち一九七六年の発行とあったからである。しかし考えてみるに、Introduction に校訂者が認めた日付が同年八月九日であるから、実際の出版のずれを考慮すれば、新刊紹介も遅きに失するわけではあるまい。しかも、この出版には私自身非常な興味を持っていたので、あえて自ら書評を買って出た次第である。その意気込みの割りに、本校訂本をじっくり検討する暇もなく、甚だ雑把な書評になりそうで、実のところ気が重い。

しかし、今更及腰になっても始まらないので、以下 *ASBh* をめぐる唯識思想研究史上の概況を紹介し、次に本校訂本について私の興味の趣くところに従って内容的検討のいささかを述べることにしたい。

*ASBh* は、周知のようじ、Asaṅga (無著) の *Abhidharmasamuccaya* (*AS*) 本文に対する註釈で、その本文解説上欠かすことのできない文献であるが、Rahula Sāṅkṛityāyana によってサンسكريット写本が発見され写真フィルムでインドに将来されるまでは、本文・註釈とも漢訳・チベット訳として知られるのみであった (*AS*: 玄奘訳大正 No. 1605 『大乘阿毘達磨集論』, Tib., P. ed., No. 5550, D. ed., No. 4049; *ASBh*: 玄奘訳大正 No. 1606 『大乘阿毘達磨雜集論』, Tib., P. ed., No. 5554, D. ed., No. 4053; P. ed., No. 5555, D. ed., No. 4054)。

しかるに一九三七年 *Sāṅkṛityāyana* にて *JBORS* (Vol. XXIII, pt. i) 誌上で報告された No. 312 の *AS* 写本は、不完全な断片ながら、一九四七年 V. V. Gokhale にて *JBBRAS* (N. S., Vol. 23) 誌上で “Frag-

ments from the *Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga”として公けにされた。これと前後して仕事を進めていたと思われる P. Pradhan は、欠損部分を主として漢訳からサンスクリットに還元し、先の断片と合わせて、一応 AS 全体をサンスクリット本として提示した。一九五〇年のことである (*Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, *Visva-Bharati Studies* 12, *Santiniketan*)。しかし、その還元部分はかなり雑なもので、それを学的研究資料としてそのまま利用することは到底できない。彼は還元 (restoration) というよりはむしろ retranslation としたら旨を断つてゐる (Intro., pp. 21-22) が、少なくとも彼はその時点で、*Sanḥitayāna* が同じ *JBORS* (Vol. XXI, pt. i, 1935) 誌上で報じた No. 86 の *ASBh* 写本を参照しえたのであるから、還元は今少しの厳密性が要求されて然るべきであったろう。私はその不備を痛感し、*ASBh* 写本の入手に一応の努力を払ってみたことは既に記した (*Asaṅga* の聖典観』曹洞宗研究員研究生研究紀要』四号、一九七二年) ので、ここで触れる必要もないが、その写本が、今回始めて公けにされたのである。

勿論、この間に、写本の段階でそれを参看

する機会に恵まれた学者も多数あったであろう。欧米の学会事情に疎い私は、この写本を利用した上で成果を示している外国の学者としては Schmithausen しか知らないが、我が国では篠田正成氏により一部 *ASBh* 写本に基づいた業績が公けにされた (*Abhidharmasamuccaya* の成立年代』『印仏研』一八一、一九七〇年)。氏と面識のない私は、いかなる状況下に、氏が写本を参照しえたか詳しく知る由もなかったが、本校訂者 Tatia の讚辞 (Intro., p. xxix) により、篠田氏の本写本校訂に対する助力の程が偲ばれたのである。讚辞によると、氏は一九六五年より三年間、インドの Nawa Nalanda Mahavihara の研究員であられ、その間本校訂を助けた。特にチベット訳・漢訳との対照においては大半が氏に負ったとのことである。

さて、篠田氏の上記論文が著わされた背景には、*ASBh* の著者問題が介在している。詳細は氏の論文を参照願うこととして、概略を示そう。中国伝によれば、註釈の著者は獅子覚 (*Buddhasimha*) でそれを安慧 (*Shīramatī*) が本文と合糅して『大乘阿毘達磨雜集論』となしたとされる。しかし、チベット伝では、単独の註釈 (P. ed., No. 5554) も、本文を合せ

も (註釈 (P. ed., No. 5555) も、共に *rgyal bahi sras* (*Jinamitra*) の著作とされている。しかるに AS の校訂者 Pradhan は、これらの伝承に直接言及することなく *Trimśkāvijñaptibhāṣya* (*TVBh*) と AS における類似文を比較した結果、*TVBh* が AS を採用していると推測し、*TVBh* の著作である *Shīramatī*こそ *ASBh* の著者であると結論した (Intro., p. 19)。この推測過程で *ASBh* 自身が比較の対象に入っていないのは甚だ奇妙なことであるが、その欠点を突いたのが高崎正芳氏である (『大乘阿毘達磨集論及び雜集論と三十頌安慧釈等との関連について』『印仏研』四一、一九五六年)。当時のことであるから、勿論写本は参照されていないが、チベット訳相互で比較がなされ、掲載誌の性格上極めて簡略な論文ながら、問題提起は充分果されている。この問題提起を受けた形で、上記の篠田氏の論文は書かれているが、論文の狙いが異なり、高崎氏の触れなかった著者問題に一応明解な結論を与えている。氏は、*AS*, *ASBh*, *TVBh* の三者を比較し、*TVBh* の文は *AS*, *ASBh* 両者を按配したものだとして推定し、*ASBh* の成立は *TVBh* 以前、即ち *Shīramatī* 以前と結論する。また *Asaṅga* あるが *Vasubandhu*

phu)の他の論書とも比較して、ASBhがそれらの論書と親密な関係にあることから、更に限定して両論師に近い頃の成立と想定している。この篠田氏の見解は、ほとんどそのままの論証で、本校訂者 Tatia によっても述べられてゐる (Intro, pp. xxii-xxv) が、篠田氏の論文及び氏名に関する言及はこの箇所は一切含まれていない。讃辞でお茶を濁したとすれば一種の虚偽である。Tatia が新たに加えているものといえば、AS, ASBh, TVBh 三者の比較の実例として、篠田氏の二例の他に四例を挙げているのみにすぎない。裏面にならがあつたかを知らぬものとしては、Tatia の述べるような見解は篠田氏の論文をもって嚆矢としなければならぬ。

それはともかく、ASBh の著者問題は篠田氏の見解で全て決着がついたわけではない。誰の著作かという問題は相変わらず残されたままだからである。篠田氏は積極的に著者を想定せず、中国・チベット両伝に対しては、御自身の導いた結論と最も妥当するものとして、中国伝の Buddhāsīmha を残す方向で考えておられるが、過去の伝承は、否定されるにせよ、肯定されるにせよ、もっと積極的な対処の仕方を要求しているように思われる。

Tatia 校訂本 *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (袴谷)

(ここで本書評と直接関係のない私事を挿入することを許されたい。本書評を草するにあたり、高崎正芳氏及び篠田正成氏の論文を調べる機会を持ったわけであるが、チベット伝の著者 Jinamitra に関し、高崎氏に「軌範師・最勝子の著作について」(『印仏研』二一―一九七二年)なる論文のあることを知り赤面した。この論文中に扱われている TRS, TRSV には、昨年私も言及する機会をもつた (『Sāns rgyas gtsō bohi rgya cher hgral pa』―解説および和訳『駒大仏紀要』三四号)が、現在まで氏の論文のことを知らず、拙稿中では全く無視したかの体になってしまったことを深く恥じたがためである。同じテキストに触れながら、論文の企図は全く異っているの、やや救われた気はするものの、最も身近なはずの雑誌掲載論文を知らなかったとは、弁解にもなるまいと唯々恐縮するばかりである。)

ASBh の著者問題に関する現況は上述のごとくであるが、篠田氏の見解を補強するにせよ、あるいはそれと異った方向で考えるにせよ、サンسكريット原文の直接参照を可能ならしめた今回の校訂本の公刊は極めて有意義なものといわねばならない。しかも、更に有

意義な点が、より別な面でも現われてくる。それは ASBh 自体のもつ性格にかかわっている。ASBh は周知のように、他の経論との類似文を多々有している。従って、サンسكريット原文が公けにされた今や、それら経論のうち、原文の知られていないものについては、部分的にはあるが、本校訂本によって原文を回収できるわけである。ASBh と他の経論との類似文の指摘は、これまでも多くの学者によって散在的になされてきた。Tatia はそれをまとめた形で八例を挙げている (Intro, pp. xxvii-xxix) が、勿論これのみに尽きるのではない。八例中原文回収に必要なものは、例(2)と(3)である。例(2)で示されるアーラヤ識の存在論証の文 (Ed., pp. 11-13) は *Yogācārabhūmi* の *Viniścayasaṅgrahaṇi* (『撰決択分』) に基づくものであることが明示されており(また、これによって「撰決択分」の原題が確認される)、『瑜伽師地論』巻第五十一、及び『決定藏論』(宇井『印哲研』第六、五四五―五五〇)解説上必須のものとなる。例(3)に挙げられる六偈 (five verses とあるは恐らく six verses の誤りであろう。Ed., p. 42) は、いわゆる『四智三慧』によって『唯識無境』を論証するもので、*Mahā-*

*yānasamgraha* (MS) 第二章及び第八章 (Lamotte's ed., II, § 14b, VIII, § 20. なお第二章にこの偈をもつのはチベット訳のみ) に示される重要な偈であるが、本校訂本によりその原本が知られたわけである。ちなみに、この偈は、*Abhidharmasūtra* からの引用偈として有名であるが、それは『成唯識論述記』『義林章』の記述に基づくのである (Tatia が自明のこととして記しているのであえて付記する。宇井『撰大乘論研究』四〇頁参照)。なお、例(6)で指摘されている *paramitā* の記述 (Ed., pp. 102-112) については、詳細な検討が篠田氏 (『阿毘達磨雜集論に於ける六波羅蜜多思想—仏教の社会倫理—』『日本仏教学会年報』三五号、一九七〇年) によってなされているので参照されたい。この論文では、同氏前掲論文とは異なり、写本は対照されていないので、本校訂本によって原文を比較してみることは大いに益あることだと思われる。

*ASBh* と他の経論との類似文は Tatia の指摘する八例に止まらなことは、既に触れたが、今後は、唯識関係の研究論文あるいは著書において散在的に言及された他の経論との関係を、本校訂本を中心に、集約的に整理し

てみる必要があるであろう。また、この必要性とも関連することであるが、今回の校訂本公刊により MS 研究上に占める *ASBh* の重要性もはるかに増大したことを、特に指摘しておきたい。MS と AS とが互いに類似する文を持つことは既に知られているが、両論とも *Asāṅga* の真作であることが従来いささかも疑われたことのない点では、*Asāṅga* 研究の最も基本的な資料となるものである。しかるに、MS はサンسكريット原典が知られず、AS も断片として原文の約四割が知られているにすぎない。この状況に、*ASBh* がほぼ完全な形で原文を提供した意義は誠に大きい。MS が AS と対応する文をもちながら、その原文が AS の断片中に欠く場合でも、*ASBh* によってかなりの厳密度で原文が想定されうるからである。ましてや、MS が直接 *ASBh* 中に対応する文を持つ場合には、その価値たるや改めて言うに及ばぬであろう。今一例を挙げ。

*caturbhiḥ ca kāraṇair apariniṣpannam ālambanam veditavyam — viruddha-vijñānānimitatayā, a[n]ālamhana-vijñānōpalabdhayā, yatnam antareṇāvīpariyāsaprasaṅgatayā, tri-vidhā-jñānānuvartanatayā ca / tataś ca grā-*

*hakasyāpy apariniṣpatih / trividham jñānam vaśīta-jñānam vipaśyanā-jñānam nirvikalpa-jñānam ca /* (Ed., pp. 41-42)

これは、先に指摘した〈唯識無境〉を証する六偈の直前に述べられるものであって、MS, Lamotte's ed., II, § 14 と内容上対応する。MS の方は経の引用のごとく処理されているので、より長文であるが、〈四智〉を述べる語はそれぞれほぼ対応している。これによって、Lamotte の還元中 (Lamotte's tr., p. 104) '*aprayanāvīparitayā, trividhā-jñānānukūlatvā* には反省が加えらるであろう。なおこの例は、最も適切な例を指摘したというよりは、私の無精のために、極めて便宜的な任意の選択に委ねられたものに過ぎない。MS を含めた他の経論と、*ASBh* との関連文については、今後更に精査される価値があるかと思う。

*ASBh* の本文である AS については、上述の Gokhale の断片公刊、Pradhan の断片を含む還元本の公刊に続き、W. Rahula の仏訳 (*Le Compendium de la Super-doctrine (Philosophie)*) (*Abhidharmasamuccaya*) d' *Asāṅga*, Paris, 1971) を挙げておくべきであろうが、ただ AS を仏訳したという域を出ない上に、

既に吉元信行氏の紹介(『仏教学セミナー』一八号、一九七三年)、あるいは Schmithausen の厳格な批評(“R. Walpola: Saṅgas Abhi-dharmasamuccaya”, WZKS, XX, 1976)があるので贅言は弄さないこととする。

### 三

以上で *ASBh* をめぐる研究史の概略に触れた。以下、眼を直接本校訂本に転ずることとしたい。ただし、最初に断ったように、全体に眼を配った上で批評しているのではないことを御了解頂きたい。

本写本の校訂に際し、校訂者のとった態度は次のように表明されている(Intro, p. xxvii)。写本において、ある語が二つもしくは三つの互いに異なる形で書写されている場合には、正規のサンسكريットに改められる。例えば、*niśritya*, *niḥśritya*, *niḥśritya*; *manaskāra*, *manasikāra* などの場合である。また、*ni* に従う子音が重複されて書写されている場合も正規の表記に改められる。例えば、*vitarka*, *dharmma* などが、それぞれ *vitarka*, *dharmma* に書き改められる場合である。概して、本校訂本では、正規の表記が採用されていると了解されればよい。写本を読む特別な訓練を受

けていない私ごときには、校訂に際していかなる態度をとるべきかは判断の埒外にあるが、私個人の便宜的視点からすれば、かく統一されていることには一応賛意を表したい。例えば、本校訂本と同じシリーズで出版された *Abhidharmakośābhāṣya* は、この意味の統一がとられていない。これには、Introduction が付されていないので、いかなる態度で Pradhan が校訂に臨んだかは不明であるが、外見からみると雑多な形態のまま表記されているので、写本どおりかと思うと、内実はそうでもないらしい(写本コピーをお持ちの江島恵教氏に、*niśyanda*, *niḥśyanda* の例を御検討頂くという機会に恵まれたが、ばらばらの表記は必ずしも写本どおりではないとのお話であった)。いずれにせよ、写本どおりという厳密性が期せないならば、正規の表記で統一されている方が便利だと思ふ次第である。写本校訂に関しては門外漢なのでこれ以上の言及は避けたい。識者の適切なる評価を俟つのみである。

校訂にあたっては、前項でも触れた、(1) Gokhale 本、(2) Pradhan 本、(3) チベット訳、P. ed., No. 5554、(4) 文契訳、大正 No. 1606、(5) チベット訳、P. ed., No. 5555 が参照されて

いる(Intro, pp. xxi-xxii)。もう言う必要もないことであるが、このうち、(1)(2)が *AS* 本文、(3)(4)(5)が *ASBh* 写本に対応するものであるが、(4)(5)は註釈中に本文を合わせもつ。この意味で、本写本は(3)と最もよく一致する。これに関連することで、本校訂者 Tatia は興味深い事実を指摘している(Intro, p. xxvi)ので紹介しておこう。写本卷末に、筆記者として Amaraśāstra なる名が記されているが、写本余白には別人の手になる訂正が施されている。時にその訂正は、(3)ではなくむしろ(4)に類似性を示す。このことは、即ち Amaraśāstra の用いたテキストがチベット訳のそれと類似しているのに対し、訂正者の用いたものは漢訳者の依用した原典に近いことを示す。その証左として Tatia は代表的四例を挙げる(Intro, pp. xxvi-xxvii)。写本の系統に関する重要な指摘であるが、*ASBh* の著者問題も含め、一度本校訂本を中心に、(3)(4)(5)を厳密に比較対照してみる必要があるかと思われる。幸いなことに、本校訂本では、かかる箇所に対する註記は怠りなく付されているようである。

本写本と漢訳との間には、章節の切り方に関しても大きな相違がある。この場合もチベ

ット訳は本写本と一致する。本写本及びチベ

ット訳は、全体を大きく五つの章に分かつのみであるが、漢訳は大きく二分したものをそれぞれ更に四つに細分する。この点は *ASBn* 本の場合も同じ事情にあるが、既に *Pradhan* を始めとする学者によって論じられ、私も言及済み（前掲拙稿「*Asaṅga* の聖典観」一六七—一六五頁）のことなのでここでは触れない。なお、いよいよの題名については、本校

訂本の *Introduction* (p. xxv) を参照された。ただしその記述中、チベット訳はテキストを十章に分かつとあるのは、いわゆるチベット訳中の巻数 (*bam po*) であって、内容上直接関係のない章数であるから注意された。内容的には本写本と同じく五分されること前言のことし。

さて、以下に、私が過去に *ASBn* に言及したことのあるうちから、特に原文が問題となる箇所を取上げて、本校訂本について批判的に検討してみたい。勿論、私が言及した時点では写本をみることは不可能であったから、批判はむしろ私自身にも及ぶことであろう。しかし、そうであれば、本校訂本公刊の重要性を傍証することにもなり、その紹介の任を別な側面から果たすことにならうと信ず

る。

昨年のことになるが、私は三種の△転依▽ (*āśraya-parivṛtti*, *parāvṛtti*) を論じた（△三種転依▽考）『*仏教学*』二号）*ASBn* の一節をチベット訳によって和訳提示した（同、五三頁）。その原文は本校訂本によれば次のとおりである。まず校訂者がなしたとおりに、この一節を転写してみよう。

§ 106. nīrantarāśrayapariṅgavīdha 'śaikṣanāgalābhinaḥ / (i) citāśrayapariṅgavīdha. cittasya prakṛtiprabhāsvarasyaśeṣa-dharmatā, cittasya prakṛtiprabhāsvarasyaśeṣa-gantukopakleśāpagamaḥ yā parivṛtīḥ, tathā-parivṛtīḥ ity arthaḥ / (ii) mārgāśrayapariṅgavīdha pūrvam laukiko mārgo 'bhīsamayakāle lokottaratvena parivṛtīḥ 'śaikṣaś cocyate sa 'śvaśeṣakaraṇīyatvāt / yadā tu nirhatāśeṣavīpako bhavati traidhātukavairāgyāt tadāsyā mārgasvabhāvasyaśārayasya paripūrṇā parivṛtīḥ vyavasthāpyate / (iii) dauṣṭhulyāśraya-parivṛtīḥ ālayavijñānasya sarvakleśānuśaya-pagamena parivṛtīḥ vedītavya // (Ed., p. 93)

この一節については註<sup>36</sup> (*Ms. sū*) が付られるのみであるが、他に問題がないわけではない。冒頭の *nīrantara* は諸本一致しているわけではないから、他の箇所準じて、諸

本間の異同を註すべきである。異同について

は、同拙稿註 36 を参照頂きたい。なお、*Schmithausen* の前掲書評は、この拙稿とはほぼ同時かむしろ後に公表されたために、その時点で私は見るべくもなかったが、同、一四頁で、同じ問題につきより詳細な検討がなされているので参照されたい。彼は数例を挙げ、この場合の *nīrantara* が「無間」(*kontinuerlich*) でなく、「無余」(*lückenlos, restlos, vollständig*) の意味であることを論じている。かなり論拠のある意見なので、それに従えば、チベット訳 *ma lus par* は *niravaśeṣa* などの異った読みを想定する必要はなくなる。しかし、異った読みを想定しないという正にその理由によって、*玄奘* はこの箇所の *nīrantara* を *Schmithausen* の否定した「無間」の意味で了解していたということになるが、これに全然言及がないのはいかがなものであろうか。というのも、*AS\* tad-anantaram nīrantarāśraya-parivṛtīḥ* 二 *玄奘訳*「從此次第無間転依」(大正三三卷、六八五頁下段一行)、*ASBn nīrantarāśraya-parivṛtīḥ* 二 *玄奘訳*「無間転依者」(同七四二頁下段八行) という対応関係は動かし難いものだからである。さて、この箇所に引き続き引用原文

°parivṛtividhā<sup>1</sup>° parivṛtir trividhā と訂正すべきもの。註もなごころをみると全くの誤植かと思われる。また°dharmaṭā, cittasya とあるは、複合語と解すべきで、°dharmaṭā-cittasya となり、次の prakṛtiprabhāsvarasya と同格と考えねばならぬ。

次は自らに反省を加える番である。私は、(iii)の文につき、°mārgasvabhāvasyāśrayapari-  
vṛtīṅ, paripūrṇā を想定して読んだ(同拙稿、五四頁)が、原文は mārgasvabhāvasyāś-  
rayasya paripūrṇo parivṛtīḥ とあるから、私の読みを訂正しなければならない。従って和訳は「実践の本質である基層の完全なる変貌」あるいは「実践の本質である基層が完全に変貌した」と改めらるべきである。それ故、°mārgāśraya-parivṛtī 三語の複合語解釈についても、この原文による限り、これは私の示した第一の解釈の論拠とならず、かえって mārga = āśraya。+°parivṛtī とする第二の解釈の論拠とならねばならぬ。即ちこの箇所は『成唯識論』の解釈と一致し、第一の論拠は極めて薄弱となる。āśraya と parivṛtī との結合を強く考えすぎたことがそもそもの誤りであったか。しかし、拙稿全体の論旨を訂正する必要は感じていない。むしろ tathatā-

parivṛtī の解釈についても「真如が変貌する」という方向が強化されねばならぬと思いついた。

もう一箇所だけ校訂本の原文を取上げよう。私としてはかなり以前のことで属するが、五種の修習に関し、MS, AS, MSA, SNS 相互に一致する文、及びそれらに対するそれぞれの註釈を一括して紹介したことがあった(「五種の修習に関する諸文献」『駒大仏論集』三号)。この中で、当然のことながら ASB の一節に触れた(同拙稿、一〇頁)が、これもこの度の校訂本に照らすと、かなり杜撰な和訳で全く赤面の至りである。それ故、引用が長きに失するかもしれないが、先と同じく和訳箇所と対応する原文をそのまま転写しておこう。

§ 136. vaipulye dharmasamādhikuśalabodhisattvanirdeśaḥ samathānuśaṅsam vipaśyanānuśaṅsam tadubhayānuśaṅsam cādhikṛtya veditavyaḥ / tatra (i) samathānuśaṅso dviividhah / (a) kṣaṇe kṣaṇe prakarśagāminyā prasarbdhyā niranntaram āśrayaspha-  
raṇāt prakīṣaṇam sarvadauṣṭhuliyāśrayadrā-  
vaṇam, (b) aviśeṣeṇa sarvadeśanādharmai-  
karasatādhimokṣasamādhānād vīvidhaskand-

hādyarthākārasaṅghāvigatāyāḥ sūtrādīhar-  
māramarateḥ pratilambhās ca / (ii) vipaś-  
yanānuśaṅso 'pi dviividhah / (a) yathāpra-  
vīcītadharmaniantarāsaṅgpramoṣāt pratismr-  
timātramukhenāparicchinākāro 'pramaṅgaḥ  
sūtrādīdharmaṣu prajñāvabhāṣah, (b)  
āśrayapariṛtī<sup>1</sup> pūrvarūpabhūtanām cāvikal-  
pītanām anabhisamskṛtānām nimittanām sa-  
mudācāras ca / (iii) tadubhayānuśaṅso  
dharmakāyasya jñeyāvaraṅgprahāṅāśrayapa-  
riṛtīsaṅghitasya paripūraye daśamyām  
bhūmanu pariniṣpattaye vā tāthāgatyaṅ bhū-  
nāv uttarād uttaratara<sup>2</sup> niṣyandavāsānādhāna-  
yogena hetupari-graha itī // (Ed., pp. 115-116)  
まずこの機会を借りて拙訳を訂正しておく  
たい。「根源を転換する」は「根源が転換す  
る」あるいは「基層が変貌する」とすべき。  
これは原文と必ずしも関係ないが、チェン  
ット訳によった以上、°hgyur は自動詞として訳さ  
れねばならぬからである。また右引用中の  
(iii) ' 即ち五種の修習中の最後を叙する段に対  
応する拙訳は、本原文により、次のように改  
める。「認識的障害を断ち、基層の変貌に包  
括される(= 基層の変貌を本質とする)法身  
を、第十の段階で充滿するために、あるいは

如來の段階で完成するために、最上なものからより最上なものへ、「法界から」注がれた潜在的な余力を引き出すという仕方によって、「法界の」因を完全に掌握すること。

「包括される法身を」とあるべきを「法身は………包括されるから」としたのは、うかつにもデルゲ版の *chos kyi sku…bsdus pas* に従ったためで、北京版によれば下線が単に *pa* とあるので、それまでが *chos kyi sku* と同格たることを示し、むしろその一群が *yois su rdsogs par bya ba* の目的語となつて、ちょうどサンスクリット原文が示す objective genitive と同じ働きをなす。原文を縁に、誤りを記して不注意を謝す。また、拙訳中に想定したサンスクリット *viśeṣa-gamana, pūrvāṅga* はそれぞれ *prakarṣa-gāmin, pūrvārūpa* と訂正されねばならない。

「最上なものからより最上なもの」とした箇所は、校訂本註2が記すように、写本には *uttarād uttarataro* とあり、AS の Gokhale 本では *uttarād uttarataram* とある。今は Gokhale 本に従ったが、写本のままで「より一層最上なる因の掌握」とするも可か。力不足で決定的な判断はできないが、Tatia の訂正にはあまり根拠がないように思われる。

さて、右引用の箇所については、諸本の一致が指摘されている限り、それらを対照することが望まれる。それを念頭に次の数点を指摘しておきたい。拙稿中「概念を離れることによつて」とした箇所は、チベット訳 (P. ed., D. ed. とともに) *hdū ses dan bral bas* とあるが、本原文によれば *sanjñā-vigatāyān* として、*rateh* にかかると。これについては異なった読みもありえたこと、同拙稿註13参照のこと。引用末尾の *hetuparigraha* は *hetu-sam-parigraha* と読まれてゐる場合もある。これに註がないのは、前後で Gokhale 本を参照している以上片手落ち。同拙稿註31を見よ。更に、右引用の §136 に続く §137 は、前者と密接な関係にあるが、校訂者の註によれば、これはいわゆる別人の挿入とあるから、諸本の系統を問題にする上で注目される。この挿入文中、*sambhinna-bhāvāna* について校訂者は否定辞の *o* を付すが、恐らく不要ではあるまいか。同拙稿註51を見られたい。

#### 四

以上、*ASBh* をめぐる研究史の一端と、*ASBh* 校訂本に関する内容検討の極く一部について述べた。いささか枝末に走った嫌いが

ないわけでもないが、それも、原文公刊という大きな意義に乗った上で始めて可能なことである。意義の大きさを知らしむる反証となれば、紹介者としてこれに過ぐる喜びはない。本校訂本を座右に置いて研究するもの多からんことを望む。詳細な Introduction と重要語の Index を付すことが本校訂者 Tatia の当初の願いだつたらしいが、その願いを果すのも後に続く研究者の義務である。

(*Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*, deciphered and edited by Nathmal Tatia, Tibetan Sanskrit Works Series No. 17, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1976, Rs. 16.00)

(昭和五十二年六月八日)